

「棉から綿へ —ひと粒の種が布になるまで—」

- 0、自己紹介
- 1、国内における綿花栽培の歴史
- 2、綿花の栽培作業
- 3、綿花の加工作業
- 4、栽培と加工
- 5、H. A. M. A. 木綿庵 (ゆうあん) について
- 6、糸紡ぎの実演 or 質疑応答

◇大蔵永常 『綿圃要務』 (天保4年、1833) より

コピー出典：『日本農書全集』第15巻 (農山漁村文化協会 1977年刊)

— 342 —

綿を作る人心得の事

先綿を始めて作らんと思ふ人は、只一年二年作

て利潤なきものと捨て捨べからず。何事にも余所にて作るものなれば、同じやうにできぬ事あるべからずと力を入、踏込て始むべし。此綿も車にて糸につむぐを見て察すべし。先車を右の手にて廻し、左りの手にてつむぐにも、紡車にわらしべをさし、夫へ篠巻の先を少し糸によりてまき付、引出して、それより段々引出してハ巻付くする事、ならひ始へ定てうひくしく、辛気なる事なるべけれども、馴て八十歳前後の少女も平気にてつむぐやうになるなり。是をよく察して、綿も土地を論ぜず作りたまふべし。第一家ごとになくてならぬ入用のものを、手づくりにして沢山着用するのミならず、代料を他へとられず、なれてハ作るに楽ミありて、多くとり得れば、用ひたる余りを売て、他より代料をとるやうになりて、甚面白きものなり。

綿栽培者の心得

綿を初めて栽培してみようとする人は、わずか一、二年で利潤がない

からといってやめてしまわないことだ。何事も、よそでつくっているものなであるから、それと同じようにつくれないはずはないと努力し、思いきって始めるべきである。綿をつくるには習練が必要であることを、紡車で糸をつむぐようすを見て察するべきだろう。まず車を右の手で廻し、左の手で紡ぐのだが、そのとき紡車にわらしべを挿し、それに「篠巻」の先を少し糸によつて巻き付けて引き出す。それから少しずつ引き出しては巻き付けすること。習い始めは手馴れず思うに任せずいらだたく辛気くさいことだが、馴れてくると十歳前後の少女でも平気で紡ぐようになる。この例をよく考えて、綿作はどんな土地に行なうべきである。なにより生活必需品を手づくりにして着用するだけではなく、その代価を取られることもなく、しかも、慣れればつくるのが楽しみとなり、また多く製作したならば、余りを売って代価をとるようになり、なかなか面白いものである。

◇本居宣長『初山踏』（天保4年、1833）より

本文コピー出典：『本居宣長全集』第1巻（筑摩書房 昭和43年刊）

訳文コピー出典：『古典日本文学全集』第34巻（筑摩書房 昭和35年刊）

きことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、實はたゞ其人の心まかせにしてよき也。詮ずるところ學問は、ただ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、學びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝるまじきこと也、いかほど學びかたよくても、怠りてつとめざれば、功はなし、又人々の才と不才とによりて、其功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし、されど大抵は、不才なる人といへども、おこたらずつとめだにすれば、それだけの功は有物也、又晩學の人も、つとめはげめば、思ひの外功をなすことあり、又暇のなき人も、思ひの外、いとま多き人よりも、功をなすもの也、されば才のもしきや、學ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止ることなかれ、とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし、すべて思ひくづをるゝは、學問に大にきらふ事ぞかし、さてまづ上の件のごとくなれば、まなびのしなも、しひてはいひがたく、



結局のところ、學問は、ひたすら、年月長くあきず、怠けないで励み努力することこそ肝心であり、研究方法は、どんなふうであってもよかるうし、それほど拘泥しないでよいのである。どれほど研究の方法がすぐれていても、怠けて励まなければ、実は結ばない。また人々の才能があるかないかによって、その結果はずい

ぶん違うけれども、才能のあるなしは、生まれつきのことであるから致し方ない。しかし、たいていは、才能のない人といっても、怠けず勉強さえすれば、それだけの結果は得られるものである。また晩學の人も、努力すれば、案外よい成果を挙げることがある。また暇のない人も、案外、暇の多い人よりも業績をあげるものである。だから才能に恵まれぬことや、晩學のこと、暇のないことなどによって、勇気を失って学ぶことを止めてはいけない。

H. A. M. A. 木綿庵（ゆうあん）

代表 梅田正之

HP <https://hamayuan.com>

Facebook 「やまのべ木綿庵」

Instagram 「you_and333」